

令和元年6月4日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02396

研究課題名(和文) 日本近代詩の翻訳不可能性に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of the Impossibility of translating Japanese modern poetry into European languages

研究代表者

佐藤 伸宏 (Sato, Nobuhiro)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：70148724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本近代詩の翻訳不可能性について多角的な検討を加えることにより、以下の成果を得た。(1)多様な日本近代詩とその翻訳との対比的考察を通して、翻訳不可能性は、近代詩固有の形式(改行・連構成)及び詩的表現・詩的言語の性格がその直接的な要因となることを具体的に解明した。(2)昭和初期に行われた俳句翻訳をめぐる議論に検討を加え、そこで提示された多岐に及ぶ論点の中に、詩歌翻訳の可能性・不可能性に関わる基本的な原理が網羅されていることを確認した。(3)日本近代詩に特徴的なオノマトペ表現に焦点を据えた分析により、翻訳不可能性から可能性へと通路を開く翻訳実践の多様な試みを具体的に指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のオノマトペ翻訳に関する研究では、基本的に単語レベルで原語と訳語とを対比する言語学的アプローチを通して、その翻訳不可能性が指摘されてきたが、本研究は訳詩の表現全体を視野に入れて分析を進めることにより、翻訳不可能性を前提としつつ可能性への通路を開く多様な試みを明らかにした。またそれによって、翻訳の可能性・不可能性をめぐるこれまでの二項対立的な議論の枠組みの問い直しを行い、翻訳の可能性と不可能性の狭間でなされる翻訳行為の意義や可能性を考察した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we obtained the following results by adding diversified consideration to the untranslatability of modern Japanese poetry. (1) Through consideration of various modern Japanese poems and their translations, we clarified concretely that the form of modern poetry and the characteristic of poetic expression and poetic language are the direct factors that produce the untranslatability. (2) By adding to the discussion of haiku translation in the early Showa era, we clarified that the basic principles concerning translatability / untranslatability of Japanese poetry were covered in the wide range of issues presented. (3) By focusing on the translation of the onomatopoeic expression, which is characteristic of modern Japanese poetry, we have pointed out various attempts to open the passage from untranslatability to translatability.

研究分野：比較文学

キーワード：近代詩 翻訳 オノマトペ 翻訳不可能性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

詩の翻訳不可能性については、現在に至るまで数多くの議論が重ねられてきている。確かに詩は一つの言語の内部に最も深く根を下ろした表現として、その語彙の意味論的コノテーションや音韻的・韻律的価値、そして語や連辞の備える複数の意味の全てを含んだ等価物を異なる言語のなかに見出すことは到底あり得ないと言わなければならない。ただし従来の議論は、主として原理的ないし理論的なレベルでなされており、詩と呼ばれる言語テキストのいかなる性格や側面が翻訳不可能性という事態をもたらすのか、翻訳実践の場そのものにおいてその翻訳不可能性の所在が具体的かつ詳細に問われることはなかった。同時に、翻訳不可能性が指摘されながらも、これまで夥しい数の詩の翻訳が行われてきたことは紛れもない事実であり、それらの翻訳が不可能性にいかに対処しているのかという問題に関しても、従来の議論は十分な検討を加えずにきている。さらに明治以降の近代日本においても翻訳不可能性に関わる発言が繰り返しなされてきたにも拘わらず、それらの言説を歴史的に跡づけ整理する作業も殆ど進められていない。既に自明化されているかに見える詩の翻訳不可能性に関する問題には、取り組むべき課題が未だ数多く残されていると言わなければならない。

2. 研究の目的

上記の背景のもとに、本研究は、日本近代詩とその外国語翻訳を対象として、詩の翻訳不可能性に関わる諸問題について、多角的な検討を加えることを目的とした。具体的には、以下の3点を目的として設定した。

近代詩の翻訳不可能性という事態はいかなる要因によってもたらされるのか、原詩としての日本近代詩とその翻訳テキストとの精緻な比較対照をとおして、翻訳不可能性の所在を翻訳実践の場において具体的に明らかにすること。

近代日本における詩歌の翻訳不可能性をめぐる数多くの発言を視野に入れ、そこでどのような議論がなされ、何が問題とされてきたのかを丹念に辿るなかで、詩の翻訳不可能性の認識の根拠を翻訳論的な観点から明らかにすること。

翻訳不可能性をもたらす典型的な事例としてオノマトペの問題を取り上げ、オノマトペ表現が詩的世界の生成に深く関与し重要な機能を果たしている日本近代詩とその翻訳に分析を加えることによって、翻訳不可能性からその可能性への通路を開く多様な試みを具体的に確認すること。

本研究では、以上の考察により、翻訳テキスト自体の分析と理論的考察の両面から日本近代詩の翻訳不可能性の問題について総合的な検討を加え、不可能性や解消しがたい制約を前提としてなされる翻訳行為がもたらす意義や可能性を改めて問うことを試みた。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を果たすため、翻訳詩一篇ごとに、原詩との比較対照をとおしてその訳出の方法や試みを具体的に明らかにすることを基本的な分析方法とするが、同時に、同一詩篇の翻訳が複数存在する場合には、比較翻訳の方法を積極的に採用した。比較翻訳の方法において、それら複数の多様な翻訳を相互に比較対照することによって、訳詩それぞれの独自の試みを明確にすることが可能となる。翻訳不可能性をもたらす詩の翻訳における多様な可能性を明らかにする上で、その方法は有効に機能する。

併せて、オノマトペの分析に関しては、従来は専ら言語学的な立場からオノマトペ表現の部分のみを取り上げて原文と翻訳を比較し、その翻訳の方法を分類、整理するという考察が通例であった。しかしオノマトペ表現そのものの翻訳が常に、不可避的に何らかの欠損、損失を孕み込まざるをえないとすれば、オノマトペの部分のみを断片化した形でその訳出法を検討することは、翻訳不可能性という理解をなぞり返すことに終わりがかねない。むしろそうした欠損や欠落が翻訳全体においていかに補填されているか、或いはその欠損を代補する表現によっていかなる訳詩の性格が形成されているかを問う観点が必要であるだろう。本研究ではそれ故、翻訳テキストの表現全体を視野に入れてその対処法を吟味する方法を採用した。

4. 研究成果

(1) 翻訳不可能性の所在

近代詩の備えるいかなる性格や側面が翻訳不可能性という事態をもたらすのか、比較翻訳的なアプローチにより、翻訳実践の場そのものにおいて、その要因を具体的に考察した。

近代詩のフォルム 改行と連構成

改行や連構成という近代詩のフォルムは、表現の裡に転換や切り替え、或いは飛躍を織り込み、それを介して自在に詩句を展開させる、近代詩固有の表現を可能にする形態として機能する。翻訳という営みは、等価性(equivalence)の原理に基づいて原文の意味内容の正確な把握を試みつつ、それを異なる言語圏の読者に整合的かつ理解可能な形で伝達することが要請されるという、言わば古典的な規範の下にある。それ故にこそ翻訳は、上述のような近代詩固有のフォルムが担う詩的機能への対処に際して極度の困難さに直面することになる。その点を、島崎藤村『若菜集』(明治 30)所収の詩とその翻訳の分析を通して明らかにした。具体的な考察対象として取り上げたのは以下の通りである。「おえふ」(“Oyo”, trans.by Shigeshi Nishimura, 『英文学思潮』25-1,1952; “Oyo”, anonym, *Introduction to classic Japanese literature*, 1955; “Shimazaki

Toson's Four Collections of Poems”, trans. by James R. Morita, *Monumenta Nipponica*, 25-3/4, 1970)、「初恋」(“First Love”, trans. by Takamichi Ninomiya and D. J. Enright, *The Poetry of Living Japan*, 1959; “Premier amour”, traduit par Karl Petit, *La Poésie japonaise*, Seghers, 1957; “First Love”, trans. by James Kirkup, *Modern Japanese Poetry*, 1978)、「おくめ」(“Okume”, trans. by Shigeshi Nishimura, op.cit.; “Okume”, trans. by James R. Morita, op.cit.; “Mademoiselle Okumé”, traduit par Kuni Matsuo et Steinilber-Oberlin, *Anthologie des Poètes japonais contemporains*, 1939)

詩的言語

室生犀星の代表作の一篇「寂しき春」(『抒情小曲集』大正7)において、「さびしいぞ」という詩句は、文脈に組み込まれず、特定の意味が付与されない言葉としてあることによって、この上ない強度を備えた詩的言語としてある。そのような文脈化されない言わば裸形の言葉として機能する詩的言語に対して、翻訳は、等価性を前提としつつ伝達すべき意味の整合性と明快さを規範とする限り対処不能に陥るほか無い。それ故にそれらの翻訳は、「さびしいぞ」という詩句を、詩の表現全体と関わらせながら、その内実や所以を補填する形で訳出を試みているのであり、それによって原詩の表現からの大きな逸脱や隔たりが生まれている。そのような詩的言語のもたらす極度の翻訳上の困難さについて、3篇の翻訳テキスト(“Le printemps solitaire”, traduit par Kuni Matsuo et Steinilber-Oberlin, op.cit.; “Lonely Spring”, trans. by Takamichi Ninomiya and D. J. Enright, *The Poetry of Living Japan*, 1957; “Lonely Spring”, trans. by Ikuko Atsumi and Graeme Wilson, *Japan Quarterly* 18-3, 1971)の比較翻訳的アプローチを通して具体的に明らかにした。

オノマトペ

日本の近代詩においてはオノマトペが重要な文彩として積極的かつ効果的に、或いは個性的に活用されてきたことは改めて言うまでもない。或る音声や様態を言語音によって模倣的に、或いは象徴的に捉えるオノマトペの言語的特質は、音が意味に直結している点にある。即ちその音自体が直截的に意味を喚起、伝達するのであり、そこに他の言語記号とは異なるオノマトペ固有の性格が認められる。そうした音と意味との結合は、個々の言語の歴史や文化的背景の中で、それぞれ個別的、個性的に形成されるものであり、言語圏・文化圏による差異が顕著に認められることは言うまでもない。そして又そのように音という感覚をとおして伝達される意味は多義的性格を備えることにもなる。それ故にオノマトペが重要な機能を果たす詩歌の翻訳は不可避的に翻訳不可能性の問題に直面することになるのである。

その点に関して、オノマトペが詩的世界の形成において重要な機能を果たしている近代詩として中原中也「一つのメルヘン」(『在りし日の歌』昭和13)を取り上げ、その翻訳5篇(“Märchen”, trans. by James Kirkup, *Modern Japanese Poetry*, 1979; “a märchen”, trans. by Kenneth L. Richard and John L. Riley, *Depilautumn-The Poetry of Nakahara Chûya*, 1981; “A Fairy Tale”, trans. by Paul Mackintosh and Maki Sugiyama, *The Poem of Nakahara Chûya*, 1993; “Un conte de fées”, traduit par Yve-Marie Allieux, *NAKAHARA Chûya, Poèmes*, 2005; “A Fairytale”, trans. by Ry Beville, *Poems of Days Past*, 2005)の比較検討によって詳細に明らかにした。

以上のように近代詩の翻訳不可能性をもたらす要因について、翻訳実践の場に於いて具体的に検討を加える時、改行や連構成という近代詩のフォルム、詩的言語としての様態、とりわけ日本近代詩に特徴的なオノマトペという修辞、そうした近代詩の様々な側面が翻訳不可能性の事態を引き起こすことが確認しうる。そしてそれらは何れも、近代詩の固有の世界の生成に深く関与する要素に他ならない。日本近代詩における翻訳不可能性をめぐる以上の考察は、取りも直さず翻訳行為に内在する二つの規範、即ち原文との関係における等価性と翻訳の読者との関係における理解可能性という規範の存在を照らし出す。近代詩の言語、表現、フォルムの担う詩的機能は、その二つの規範をともに、同時にみたく翻訳を実現することに極度の困難さをもたらすのである。更にまた翻訳不可能性の認定においては、常に、暗黙の裡に、等価性の原理こそが前提に据えられることも以上の検討をとおして確認できる。翻訳を原文と等価の表現をとおして同一の意味内容を再現する営みとして規定する等価性の原理を前提ないし基準とする時、如上の言語態としての近代詩テキストは翻訳不可能であるとの認定が不可避的になされることになるのである。

(2) 詩の翻訳不可能性をめぐる議論

日本における詩歌の翻訳不可能性をめぐる議論は明治時代以降繰り返して行われてきたが、その中で最も興味深い事例は昭和8年から翌年にかけての俳句の外国語翻訳に関する論争である。その発端は、昭和7年12月に宮森麻太郎による俳句の英訳アンソロジー、*An Anthology of Haiku Ancient and Modern* (Maruzen Co. Ltd.)が上梓されたことにある。この800頁を越える近世近代の俳句翻訳アンソロジーをめぐって、「今あるやうな翻訳では、発句の翻訳は、到底不可能の事であるとしか考へられない。」と末尾に指摘する小宮豊隆「発句翻訳の可能性」(『文藝春秋』昭和8・8)が発表され、宮森が直ちに反論(「小宮君の発句翻訳論を駁す」、『読売新聞』昭和8・8・20、22、23)と同時に杉村楚人冠「反訳か反逆か」(『改造』昭和8・9)による強固な翻訳不可能論の発言も出されたことが契機となって交わされることになった議論である。以後、翌昭和9年にかけて20篇近い論が提出されたこの論争は紛れもなく詩の翻訳可能性/不可能性に関する議論となっており、その中でこの問題に対する多様な見解が提示されている点で極めて興味深い。それらの言説で興味深いのは、その何れもが翻訳における等価性の原理を自明の前提としていることに他ならない。その前提に立つ限り、原詩の正確、厳密な再現としての翻訳は

不可能と見做される他ない(小宮豊隆・杉村楚人冠)。一方、その前提を共有しつつも、不可能性のさなかでなされる翻訳が担いうる効用や意義の確認をとおして、翻訳の存在を肯定的に擁護する立場に宮森麻太郎はある。そして以後の議論の中では、恒藤恭「非、非常時的論文 肯定できぬ楚人冠氏の翻訳論」(『読売新聞』昭和8・9・7)、萩原井泉水「俳句翻訳是非」(『文藝春秋』昭和8・10)、高垣松雄「翻訳の諸問題」(『新英米文学』昭和8・10)等、宮森の見解と基本的に立場を同じくして翻訳の存在の意義や可能性を主張する発言が一つの流れとなる。また宮森自身も再論「日本文学の海外進出」(『文藝春秋』昭和8・11)・「翻訳は文明なり」(『中央公論』昭和8・11)において同趣旨の発言を繰り返している。

以上のようにこの論争は、等価性の原理を牢固たる前提に据えた上で、詩歌の翻訳の不可能性あるいは可能性についての意見が交わされる形で始まるが、そうした中で、その前提そのものの緩やかな問い直しとなされることになる。それは澤村寅二郎「翻訳の意義」(『中央公論』昭和8・10)や萩原朔太郎「詩の翻訳に就いて」(『生理』昭和8・11)に確認される。それらの見解は、等価性の原理を自明の前提とする立場とは異なる位相に於いて、詩の翻訳の成立の可能性を提言するものであり、その脈絡の中で、等価性の前提自体を判然と相対化する議論が現れる。井上思外雄「訳詩の可能性に就て」(『新英米文学』昭和8・11)及び山宮允「訳詩論」(『英語英文学講座』昭和9・3)がそれである。

井上の「訳詩の可能性に就て」は短い論ではあるが、ここに取り上げている議論の中で重要な位置を占める。井上が前提とするのは、等価性の原理に基づく翻訳を「翻訳に於ける理想」と捉えながら、「翻訳といふものに別の、特別の意味を見出すこと」にある。それは「原文に於ける思想、感情及びその表現が心に訴へるものを掴んで、それを訳文のうちに再び創造する事に意義を見出す」、「創造的翻訳」というあり方である。そして「創造」は常に個性が付随する故に、「一つの原詩が二人の違った訳者によつて翻訳された場合、その二つの訳詩がそれぞれに相異なる姿を示す」ことになり、また「ある詩の翻訳が常に原詩の面影を伝へないからと言つて直ちに此の意味に於ける訳詩の不可能説を持出すことは出来ない」。そのように原文の「再現」ではない、原文に「内在する価値の創作」としての「創造的翻訳」こそが、「芸術的真」を備えて「読者の心に訴へるものとなる」と井上は言う。山宮允の見解も同断である。山宮は「原作の正確な再現」としての翻訳を「理想的な翻訳」としつつ、「かかる翻訳は事実上存在する筈はない」と言明する。何故なら翻訳の営みには常に訳者の個性が関与し、また言語の差異が牢固として存在するからである。山宮はそうした認識の下で、「原作の正確な再現といふ批判の基準の適用を控へ」ることによって、「翻訳は一種の文芸作品であり、創作である」と主張する。山宮によれば、翻訳は「創作」である故に「原文を離れた訳が、特に詩の場合真に忠実な訳と云ひ得る場合が屢あり得る」のであり、また「原作以上と評価し得る」、「芸術的価値」を備えた訳詩も存在しうることが、上田敏『海潮音』所収の訳詩を引用しつつ指摘されるのである。

井上、山宮はともに詩の翻訳の可能性を強く主張する立場を示しているが、それは暗黙の前提として自明化されていた等価性の原理を相対化することによってこそ可能となっているのである。

以上、詩の翻訳の可能性/不可能性をめぐる昭和8、9年の論争を概観したが、そこで最も重要な問題としてあったのが等価性の原理であることは明らかであろう。それを自明の動かし難い前提に据える時、詩の翻訳は不可能と見做される他ない。しかしその前提を問い直し、相対化し、或いはそれとは別途の基準を立てる中で、詩の翻訳の可能性が見出されることになるのである。その時その翻訳は、訳者による「創作」「創造」の営為としての性格を備え、原詩とは「別のもの」としてありつつ、原詩に呼応する「芸術的価値」「芸術的真」を獲得することになる。詩の翻訳(不)可能性に関する議論においては、翻訳に於ける等価性の原理の位置付けや比重の置き方が個々の見解・立場に深く関与していることがここに確認される。

(3)詩の翻訳不可能性から可能性への通路を開く試み

翻訳の古典的規定としての等価性の原理は、原文と翻訳との間のメッセージ、意味内容および表現の同一性をその中核に据えている。原文と等価の表現をとおして同一の意味内容を再現するものとしての翻訳。そうした規定が原文への忠実さを規範とした翻訳評価の根底を形成し、翻訳不可能性の認定も又それを前提になされることになる。しかし極めて自明であるかに見えるその規定ないしは条件が、これまでなされてきた夥しい数の翻訳、とりわけ文学テキストの多様な翻訳実践に対して、周到な、或いは有効な定義として機能しうるとは到底認めがたい。定義上、翻訳が極度に困難と想定される文学テキストに関しても様々な翻訳がなされてきた事実、そうした古典的理念は十分に関与し得ないのである。

翻訳の定義の根底をなすそのような等価性の原理について再考を加えるために、ここで改めて先に言及した中原中也「一つのメルヘン」とその翻訳を取り上げよう。「一つのメルヘン」においては「さらさら」というオノマトペが繰り返され、その音が複数の意味を喚起することによって詩的世界の生成と展開が果たされており、それ故に詩の末尾に至る展開は不合理性や不条理性を色濃く示している。そうした「さらさら」の音色とその多義的な機能に等価的に対応しうる外国語の語彙を見出し、そして「一つのメルヘン」の詩的世界の十全な等価的再現を実現することは不可能と言うほかあるまい。この詩の翻訳を試みた5篇のテキストはそれを明らかに証していた。オノマトペが重要な機能を担うこうした詩の翻訳は、常に原文に対する距離や歪曲、或いは欠損、欠落を孕み込むこととならざるを得ないのである。但しそのように等価性を実現し得ないことを以て直ちにそうした詩の翻訳不可能性の証左乃至は根拠と見做すべ

きではなからう。

それらの一連の翻訳詩がそもそも相互に全く異なる、多様なテキストとして成立していることは実は驚くべき事実と言わなければならない。そしてそうした差異の裡に見出されるのは、原詩に対する隔たりや欠損を前提としつつ、テキストの表現全体をとおして、それを補填し、或いは代補し、さらには別途の表現へと転移、変換する多様な試みに他ならない。換言すればそれらは、翻訳不可能性の場そのものの中で、それぞれ個性的な仕方、原詩との間に緩やかに対応や類縁の関係を敷設することを試みているのである。「一つのメルヘン」と題された特異な日本語詩の翻訳可能性に向けた意識的、方法的な試みとして、とりわけ注目に値するのは、James Kirkup 訳及び Yve-Marie Allieux 訳のテキストである。

前者の翻訳“Märchen”では現在時制の文体が採用され、原詩の「さらさら」とは脚注による釈義を伴う形で音訳される。同時に、訳出に際して«streaming»や«glitters»«scattered»他の原詩には不在の表現を周到に織り込むことによって、この翻訳テキストの中で«Sarasarato, sarasarato»の詩句を軸として複数的なモチーフが浮上するのであり、それらの相関と変移をとおして訳詩の末尾に至る展開が導かれる。そこでは、原詩の「さらさら」とのオノマトペが担う多義的機能が、各連の具体的な表現との関わりにおいて«sarasarato»の詩句に付与される複数的な意味やイメージによって代替されているのである。それは、音訳の詩句«sarasarato»が、そもそも外国語圏の読者にとっては意味の空白化した表現としてある故に可能となった訳出の方策と言ってもよい。また末尾で流れ出す水は豊かな潤いをもたらす生命的モチーフを濃厚に宿し、この訳詩の創世神話的性格を形成するが、それは原詩に潜在する一つの側面を際立たせるものでもあろう。一方、後者のフランス語訳“Un conte de fées”これは実は、オノマトペの訳出を試みた初訳に大幅な改変を加えた再翻訳テキストであるが、この訳詩の場合には、オノマトペ自体の訳出は放棄された上で、原詩の備える音楽性を一層増幅させる方向で翻訳が試みられている。そもそも原詩は「さらさら」との詩句を繰り返しつつ軽やかな明るさと流動性を帯びた音色を伝えているが、この訳詩は同一音や類音の反復等、フランス語の音色効果を存分に発現させる。そしてそうした性格を集約するかの如く、末尾において流れ始める水は«L'eau murmurante en murmurant coulait...»というこの上なく豊かな音楽性をたたえた表現によって呈示されるのである。併せて本翻訳テキストの大きな特徴をなすのは、第一連に現れる«Les murmures du soleil»という表現であろう。原詩には全く見出し得ないこの詩句が伝える、太陽の発する囁き、呟きの声、その微かな音が全体を貫くことによって、“Un conte de fées”は自然神話的な様相に彩られるのであり、そうした世界に生起する出来事として、オノマトペの機能によってもたらされる原詩の不条理な展開の語り直し、再表現がなされているのである。

これらの翻訳は、厳密な等価性の原理を前提に据えるならば、原文との同一性の規範から明白に逸脱したテキストとして、翻訳の名に値しないものとも見做されよう。しかしながら又ここでは、むしろそうした原詩からの隔たりや歪曲をとおしてこそ、それぞれに原詩の世界との同一化ならぬ近接、類縁化が試みられていることは紛れもない。それらの翻訳テキストは、原詩の言わば 変形 において、等価性の原理から緩やかに解き放たれる形で、多層的な性格を備えた原詩との或る側面における対応の関係を作り出しているのである。

原文と翻訳という二つのテキストの関係については、ジョン・サリス『翻訳について』(2002)、ミカエル・ウスティノフ『翻訳』(2003)、アントワヌ・ベルマン『翻訳の時代』(2008)その他、近年の翻訳論が周到な議論を重ねてきている。それらの一連の翻訳論が異口同音に語り出しているのは、翻訳の古典的規範としてある等価性の原理の無効性の指摘であり、そして翻訳は原文と異なる、別のテキストとして存在することの言明に他ならない。但し勿論両者は、等価的同一性ならぬ差異において、或る密接な関係で結ばれているのであり、その点に関してはベルマンが、父親と子供との関係という巧みな比喻の下に語り出している。即ち翻訳とは、原文に対する差異や距離の中において、原文との間に或る種の連続性、類縁性を生み出すこと、そうした関係を新たに敷設し、創り出す行為に他ならないのである。そしてそれは、先に触れたアリューによる初訳と再翻訳との関係に示されているように、常に一回的な行為としてなされることになる。上記の翻訳論の提示する見解は、本研究が問題としてきたような、その本質において翻訳不可能性が指摘されてきた詩歌の翻訳について再考する際にとりわけ貴重な発言と言ふべきであろう。中原中也「一つのメルヘン」の一連の翻訳をとおして確認されるように、それらの翻訳テキストは、それぞれに大きな歪曲や欠損を抱え込みながら、その隔たりを介して、原詩との間に「親密な関係」(ベルマン)を形成し、構築することを試みた、一回的で個別的な嘗為として捉えられる。そのように個々の翻訳が固有の角度から関係化を試みる中で、原詩の或る側面が強調され、或いは増幅され、さらには原文の潜在的な性格や要素が顕在化することにもなる。そのように二つの異質な言語の間 界面において、翻訳不可能性のさなかでなされる、原文との間にその都度新たに或る側面での類縁や呼応の関係を形成、敷設する試みの裡でこそ、翻訳の不可能性から可能性への通路が開かれることとなると考えられる。

5. 主な発表論文

[雑誌論文](計 3件)

佐藤伸宏、オノマトペの翻訳(不)可能性 中原中也「一つのメルヘン」と翻訳、東北大学文学研究科研究年報、査読無、68号、2019、pp.1-27

佐藤伸宏、室生犀星の 抒情小曲 俳句と近代詩、文学・語学、査読無、222号、2018、pp.104-117

佐藤伸宏、新体詩集としての『若菜集』、東北大学文学研究科研究年報、査読無、67号、2018、pp.1-36

〔学会発表〕(計 5件)

佐藤伸宏、詩の言葉の働き、都留文科大学国語国文学会、2018

佐藤伸宏、日本近代文学と 歩行、日本文芸研究会、2018

佐藤伸宏、北原白秋と『赤い鳥』童謡、日本比較文学会、2018

佐藤伸宏、室生犀星の 抒情小曲 俳句と近代詩、全国国語国文学会、2017

佐藤伸宏、詩の言葉・小説の言葉、PFA 国際歯学会日本部会、2017

〔図書〕(計 1件)

佐藤伸宏 他、東北大学出版会、一九四〇年代の 東北 表象、2018、265

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。